
1960年代（ポスト1964東京オリンピック）に 見るテレビの映像美に関する基礎的研究

～川辺の風景やスポーツなど日常生活のありふれたシーンを美しく伝える手法の発見～

Basic Study of Visual Expression on Japanese TV in the 1960s After the 1964 Tokyo Olympics

—Methods Devised to Beautifully Convey Images From Daily Life
Such as Those of Natural Scenery and Sporting Events—

脇田泰子 飯塚恵理人

1. はじめに

2019年度NHK番組アーカイブス学術利用トリアルにおいて、1964年夏季東京オリンピック（以下、「東京オリンピック」と記す）の芸術展示とそれを題材にした番組視聴のもと、映像を含む内容について検討した¹⁾。東京オリンピックの芸術展示は、茶道具や能楽など古典的な美術・芸能に限らず、民俗芸能や切手、陶器など日常生活に関わる素材も扱い、それらをより美的に伝える点に大きな特徴が存していることが明らかになった。

例えば1955年11月6日放送の全国郷土芸能大会「アイヌの舞踊～第6回全国民俗芸能大会～」(日本青年館)の紹介番組は、スタジオ撮影でありながら演者が付けた毛皮のつやのグラデーションが背景セットの技巧により実際と違わぬ雰囲気視聴者に伝わってくる。1959年4月3日放送の「日本の伝統 柔道」では、技が決まった瞬間の

選手の所作の端正な美しさと表情を豊かなカメラワークで表現するという手法が駆使されている。

本論では、このようなテレビの世界が作った映像美に注目し、テレビ独自の映像美の創造が「映画とは異なる映像メディア」としてのテレビの独り立ちが成されたという事実が存することを明らかにする。さらに、東京オリンピックとその芸術展示を契機に、庶民のスポーツおよび暮しの芸術への関心の高まりを、1960年代末までのアーカイブス視聴番組から論証する。アーカイブ視聴希望番組は、飯塚が東京オリンピック後の日本各地の風景とその土地の一般庶民の生活風俗の映像を担当し、脇田がスポーツ関連の映像を担当した。スポーツ関連番組については、特に海外取材番組として1969年に放送された「あすのスポーツ」を取り上げ、当時の海外スポーツ事情を伝える視点にどのような特徴が存するかを検証した。とりわけ、成功裡に終わった東京オリンピック以降、外国のスポーツとそれを取り巻く社会に着目し、日本に紹介しようとする意図が奈辺にあるのかを

論じた。

臨場感をもってお茶の間に届けられる映像が急増してきたこの時代において、それが特に「美しい映像」として認識されるためには、送り手の側に伝えたいとする意図を強く持つ「こだわり」が不可欠となるはずである。その「こだわり」の映像として、市井の人々の日常生活やその延長線上にある何気ない風景が観られることは、テレビ自体が誕生から10年以上が経過し、社会に広く普及し日常的な大衆メディアとして定着したことの証しでもあろう。映し出される映像から、このようなテレビメディアの発展自体が読み取れることも、1960年代ならではの特徴になっている。

2. 静止画映像に観る「日本各地の風景と風俗」の表現

考察した画像と特徴的な静止画、およびそこから導かれた考察について以下にまとめた。個々に挙げしたが、全てに通じるのは視聴者の身近にあるもの、身近にはないが親近感を持たせるものを美しい映像美で伝えようとする姿勢であり、東京オリンピックの芸術展示の理念の実践が感じられた。

I 番組名「新日本紀行 北薩摩」(1967年2月6日放送)

①静止画1 00:04:09:14 「泉水のふぶきの中の橋と商館風の建物」

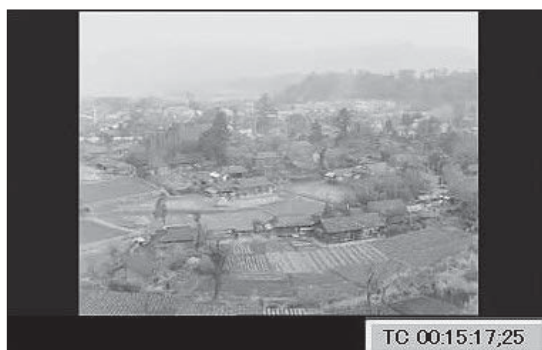
ナレーションに「古くから栄えた町」とある通り、美しい洋風の商館風の建物からこの町が現在も栄えていることが伺われる。川を流れる雪解け水から、厳しい寒さの中に春の近いことを表現しようとする意図が感じられる。(画像1)



画像1

②静止画2 00:15:17:25 「大口盆地の水田と農家」

整地された水田と数多くの農家から栄えている農村であることが伺われる。効果として遠景が霞んでおり、陶淵明の漢詩に描かれている美しい中国の田園風景を感じさせる画像となっている。(画像2)



画像2

II 番組名「新日本紀行 北九州市」(1966年8月29日放送)

①静止画1 10:02:02:28 「北九州市と対岸を結ぶ吊り橋」

五つの市町村を対等合併した北九州市。全長2000メートルに及ぶ近代的な吊り橋と対岸の工場地帯の美しい遠景が、この工業地帯の繁栄を美しく見せている。(画像3)



画像3

②静止画2 10:10:27:03 「近代的な美しいプールで行われている小学生の水泳教室」

北九州市が子供たちの運動能力向上に力を入れていることを分かりやすく表現している画像である。(画像4)



画像4

③静止画3 10:13:06:21 「小倉城に行く太鼓山車と祭礼の行列」

北九州市は工業地帯にありながら藩政期以来の城跡が緑の美しい公園として整備されている。そこで江戸時代の伝統を受け継いだ山車祭が盛大に行われる様を表し、近代的工業都市の面と伝統的文化的な街の二面があることを美しく伝える画像となっている。(ナレーションで映画「無法松の一生」の舞台であることを述べる) (画像5)

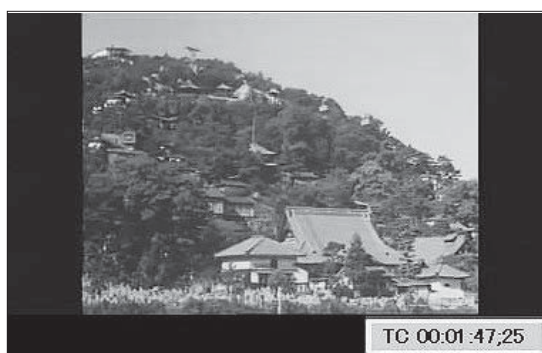


画像5

Ⅲ 番組名「新日本紀行 尾道(広島県)」
(1968年12月9日放送)

①静止画1 00:01:47:25 「近景・遠景の山裾と山頂の大きな寺院、二つを結ぶ近代的なロープウェイ」

カラー映像で青い空と緑の山と美しく立派な寺院を映す。ロープウェイがあり見学者にとって便利な場所であることを強調して、観光振興の意図も伺える。庶民の日常にある美しい光景を紹介しており、東京オリンピックの芸術展示の理念である「日常の美」をテレビ放送においても積極的に取り扱おうという意図を感じる。視聴者に「この場所を訪れてみたい」と思わせる旅行番組の先駆的な要素を、「新日本紀行」という番組が持っていたことを示す画像である。(画像6)



画像6

②静止画2 00:04:09:22 「明治の尾道を描いた絵馬」

瀬戸内海を行き来する船が米などの物資を積み替えるため立ち寄り、港を埋め尽くすほど栄えた浜間屋の様子を、明治の絵馬の絵を映すことによって分かりやすく美しく象徴的に示すことに成功した画像である。（画像7）



画像7

③静止画3 00:10:44:23 「林芙美子が七年間住んでいた場所であり、今は「うずしお小路」と呼ばれる通り」

雑貨店や洋品店、孫娘二人を連れて買い物に訪れた老婦人などの画像を用いて、貧しいが人情味豊かな下町であることをわかりやすく表現しているコマ。林芙美子の文学世界がこのような環境から育まれたことを伺わせる文学アルバム的な要素を持った画像である。（画像8）



画像8

④静止画4 00:12:38:01 「職人の妻が描いている田の面船の絵」

松と鶴で子供の成長を祈るめでたい温かみのある図柄で、尾道の庶民生活の中にも美しいものを発見できるという画像になっている。（画像9）

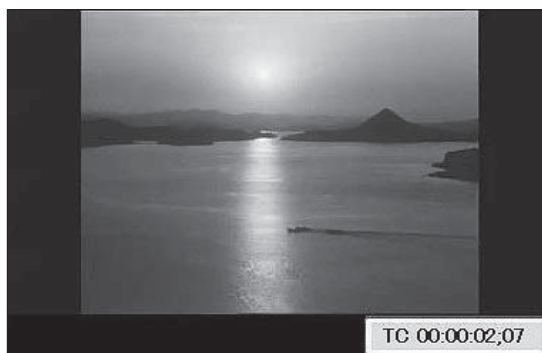


画像9

Ⅳ 番組名「新日本紀行 不知火海 ～熊本県～」（1968年6月24日放送）

①静止画1 00:00:02:07 「静かな風の波穏やかな湾内を、漁船が向かって右から左に航行している」

湾内の岬や島が観える美しい夕焼け。沈みゆく太陽。不知火海が美しい自然を残している場所であることを、冒頭で視聴者に印象付ける画像である。（画像10）



画像10

②静止画2 00:03:49:22 「漁船に乗っている大勢の中学生くらいの生徒達」

不知火海では、漁船が漁のためばかりではなく通学や通勤に日常的に使われており、海上交通がとても盛んであることをわかりやすく印象付ける画像である。(画像11)



画像11

3. ポスト1964東京オリンピック

史上初の衛星生中継により華々しく始まった1964年東京オリンピックは、日本の戦後復興を世界中に大きく印象付けることとなった。当時の日本は、その世界に「追い付け、追い越せ」とばかりに社会が一丸となって、ひたむきに高度経済成長の道を邁進していた。大会には93の国と地域からの参加を得て、時のブランデーIOC(国際オリンピック委員会)会長から最後には「見事に最高級のオリンピック大会を開催した」との賛辞を呈される運営ぶり、大成功を収めた。したがって、日本代表が世界トップレベルの強豪と熾烈な闘いを展開し、悲願の金メダルをもぎ取りにいく雄姿を目の当たりにする時、国民がとりわけ自分たちの夢も思いも重ね合わせて熱狂したとしても何ら不思議ではない²⁾。このように、映像メディアを通じて勝つスポーツを観る快感を決定的に知ってしまった日本国民にとって、スポーツとはあくまで観戦するものであり、その後も自ら楽しめるものとはなかなか得なかった。つまり、

大会後にスポーツの裾野を広げ、大衆化を図ることができなかったという事実が、東京オリンピックの限界でもあったと言えよう。

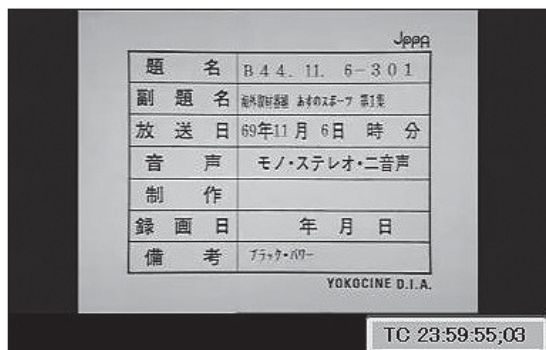
そもそも、他の国々において、スポーツはどのような形で社会に根付いているのだろうか。また、スポーツの大衆化と、トップレベルを極める体制の整備にはどのような関係が認められるのか。これが、東京オリンピックを成功させた日本が、東京で出会った世界のスポーツに対して初めて抱いた素朴な疑問だった。その答えを海外に求めて取材し、しかも活字ではなく、映像に収めて持ち帰り、シリーズ番組として作り、放送する。この海外スポーツ事情の番組制作自体が、ポスト1964東京オリンピックにしか着目することのできない新たな映像美追求の集大成となっていると言っても過言ではない。

4. 「あすのスポーツ」

1969年11月から12月の毎週木曜・午後07:30～午後07:59に放送された「あすのスポーツ」は、以下第1集から第6集までのシリーズで構成された海外取材番組である³⁾。

- 第1集 (11月6日)「ブラック・パワー」アメリカスポーツの悩み
- 第2集 (11月13日)「アルプスの二大勢力」選手と業者の結びつき
- 第3集 (11月20日)「西ドイツの若い力」すばらしい青少年対策
- 第4集 (11月27日)「十億人のサッカー」ブームの魅力を探る
- 第5集 (12月4日)「高地民族」台頭した高地の新勢力
- 第6集 (12月11日)「伝統とイギリス」古い国の大きな変貌

タイトルを見るだけでも、スポーツに取り組む姿勢や環境のみならず、それぞれ社会の内情・背景



画像12 「あすのスポーツ」第1集収録冒頭に記録された放送関連情報

の異なる多様な国を対象としていることがわかる。それだけに、シリーズごとに個別のクルーを派遣したのかと考えたくなるが、実はそうではない。これは、報道局運動番組部・増島一哉プロデューサー、報道局社会部・岩瀬孝記者、報道局カメラ取材部・細根勇カメラマンの3名から成る「NHK取材班」が、この年の6月から約3ヶ月間にわたり、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの三大陸計12ヶ国を駆け回って取材したものである⁴⁾。

NHK番組アーカイブス学術利用トライアルを通じて全シリーズの閲覧申請を出したところ、視聴可能だったのは第1～第5集までの5本であった。いずれも29分オールカラーのフィルム構成番組である。第4集のサッカーの舞台は南米ではなく、中米のメキシコだった。同じ取材班が百日間も海外取材の旅を続ける強行軍では、さすがに南米までは足を伸ばせなかったのかもしれない。だとしても、放送前年の1968年には東京オリンピックの次の夏季オリンピックがメキシコシティで開かれていた。しかも、1970年ワールドカップサッカーもメキシコ開催の予定である。これで取材先がメキシコである理由は優に立つ。

さらに、メキシコ五輪でサッカーと言えば、今なお日本サッカー史上に燦然と輝く快進撃を記した日本代表である。屈指の強豪ブラジルを相手に世界中が驚く1-1のタイで堂々と渡り合い、その

勢いでフランスも破って準決勝に進出した。ここでハンガリーに敗れはしたものの、3位決定戦で地元メキシコと対戦した。日本のプレーには、中南米ではごく当たり前に見られるラフな部分や反則がまったくない。自国応援ムード満点の地元観衆は、この目からウロコのクリアさに引き込まれ、試合途中からその多くが“ハポン”（Japón スペイン語で日本）コールに鞍替えしたと言われるほどだった。ついに2-0で日本は銅メダルを獲得し、フェアプレー賞まで贈られた。さらに6試合7得点を叩き出した釜本邦茂選手が大会得点王に輝くなど、歴史的に素晴らしい成績を収めたのである。しかし、1960年代に入るまで日本は五輪予選も突破できない低迷を重ねてばかりいた。地元開催の東京オリンピックを前に、無条件で出場こそできるものの、無様なプレーは見せられないとして、ドイツからデットマール・クラマー（Dettmar Cramer, 1925-2015）をコーチとして招き、ともに「同じ釜の飯を食う」コミュニケーションで技術とともにそのサッカー哲学を学んだ結果、ベスト8の快挙を成し遂げた。だが、それを凌ぐ成績は4年後に訪れたのである。チームは大半が東京五輪のメンバーだったが、既にコーチを退いていたクラマー氏は、FIFA（国際サッカー連盟）技術指導員としてメキシコシティのアステカ・スタジアムのスタンドでこの瞬間に立ち会い、これが人生最高の瞬間だった、と後に語ったという⁵⁾。このような記憶もまだ鮮やかなタイミングで、ワールドカップを翌年に控えるメキシコ・サッカーの取材が決定したのであろう。

5. メキシコ・オリンピックと ブラック・パワー・サリュート： 人種差別と黒人スポーツ

それでも、そのメキシコ・オリンピック⁶⁾で全世界に最も強烈な印象を与えたシーンは、陸上男子200mの表彰台で黒い手袋をしてこぶしを突き

上げる二人の黒人メダリストの姿である。金メダルのトミー・スミス (Tommie Smith, 1944-) と銅メダルのジョン・カーロス (John Wesley Carlos, 1945-) はともにアメリカ人で、米国歌が演奏され、星条旗が掲揚されると、下を向き、こぶしを高く突き上げ、人種差別への無言の抗議を示した。公民権運動を支持するこの示威行動「ブラック・パワー・サリュート (Black Power salute)」に観客からはブーイングが起き、ニュースは世界中を駆け巡った。政治的パフォーマンスは五輪憲章に抵触する⁷⁾として、二人はすぐさまオリンピックから永久追放され、翌日にはアメリカ強制帰国の途に就かされた。職も失うなど代償は大きかった。それから半世紀以上経った2019年、二人はアメリカ・オリンピック・パラリンピック委員会 (USOPC) の殿堂入りで表彰され、名誉を正式に回復された。その翌2020年にはミネソタ州ミネアポリスで黒人男性ジョージ・フロイドさん(46)が白人警官から首を圧迫されて亡くなったのを機に、世界中で反人種差別を訴える「ブラック・ライブズ・マター (Black Lives Matter = BLM 黒人の命も重要だ)」の抗議運動に発展したのは周知の通りだ。これを「21世紀版の公民権運動」と呼ぶ人もいる。アメリカの人種差別問題は、トランプ政権の4年間にぐんと深まった社会の分断とも相まって、さらに根が深く複雑な社会問題となってきた。

1969年放送の「あすのスポーツ」は全6集中、2集までがアフリカ系選手をテーマとする。1960年代後半と言えば、それこそアメリカで1964年に人種差別撤廃を謳った「公民権法」が制定されたが、その後も差別は一向に消えず、公民権運動たけなわの時期であった。しかも、その指導者であるマーチン・ルーサー・キング牧師 (Martin Luther King Jr., 1929-1968) がメキシコ・オリンピックの半年前に暗殺されたため、アフリカ系アメリカ人の選手たちは大会ボイコットも検討していた。スミスとカーロスの二人はボイコットこそ

考えなかったが、表彰台に立つ時にはブラック・パワー・サリュートの抗議に出ることを密かに決めていた。

このような時代背景もあり、「あすのスポーツ」はシリーズ全体を通して、アメリカの人種差別と黒人スポーツの関係性に切り込む第1集のインパクトが非常に強い。また、エチオピアとケニアを例にアフリカ高地の陸上長距離選手を取り巻く状況を伝える第5集とともに、この2本がアフリカ系選手の世界的な動向を描いている。もちろんエチオピアは、東京オリンピック男子マラソンで優勝して五輪2連覇を果たした「裸足のアベベ」・ビキラ (Abebe Bikila, 1932-1973) の故郷である。

第1集によれば、アメリカには当時、アフリカ系人口2千万人中、1500万人が大都市のスラム街に住み、その40%が生活補助を受け、ニューヨークの黒人120万人中、最大の黒人街ハーレムには三分の一が暮らす、正確な数字は誰も知らないという。ごみの溜まった街路で昼間から所在なげに酒をあおる黒人のアップが映し出される (画像13)。そのスラム街の片隅でクラブを片手に、バットを振ったり、ベース間を走り抜けたりして野球に興じる子どもたち。「その表情は、街の暗さとは対照的に明るさでいっぱいです。」さらに、貧困や暴力など、黒人を取り巻く社会環境は、この少年たちの上をも覆っているのだという。取材



画像13 貧富の差や人種差別の憂さ晴らしからか、ウイスキーもラップ飲み

班は、少年たちに将来何になりたいかとマイクを向ける。口々に「野球か、フットボール（アメフト）」と答える声が効果音として響くが、字幕スーパーは出ず、ナレーションで、「どの少年もベースボール、バスケットボールといったプロスポーツの選手になることを夢見ています。」と補足される。お金とよい家庭がほしいから、というのが主たる理由だ（画像14）。



画像14 プロスポーツ選手になってお金持ちになりたい！

大リーガーの成功例として、ヒューストン・アストロズ3番バッターのジム・ウィン（James Sherman Wynn, 1942-2020）外野手を、本拠地のアストロ・ドームと彼の自宅に訪ね、その人気と活躍、裕福な成功者としての暮らしぶりを描く。アストロは「宇宙の」と言う意味だが、それはヒューストンにNASA（アメリカ航空宇宙局）有人宇宙センター（当時の名称。現・ジョンソン宇宙センター）があるからだ。フィルムに映った景色ではあっても、1969年夏のテキサス州の日差しは見るからに強そうだ。7月に世界初の月面着陸とその全世界中継を成功させて無事帰還したアポロ11号の宇宙飛行士3人は、ニューヨークやシカゴなどの大都市のパレードに出かけている。

アフリカ系アメリカ人選手とスポーツとの関係は、1904年の地元セントルイス・オリンピック陸上200mハードルと400mハードルで銅メダル

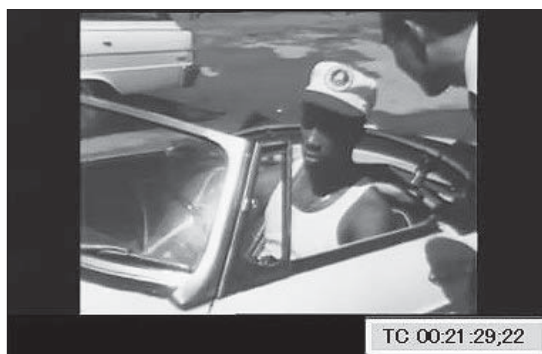
を獲得し、アフリカ系アメリカ人初のメダリストとなった大学院生ジョージ・ポージ（George Coleman Poage 1880-1962）に始まる。4年後の1908年ロンドン・オリンピック陸上メドレーレー⁸⁾の一員としてジョン・テイラー（John Baxter Taylor Jr., 1882-1908）が初の金メダルを獲得した。アドルフ・ヒトラー（Adolf Hitler, 1889-1945）がゲルマン民族の優越性を誇るために開催した1936年ベルリン・オリンピックでは、ジェシー・オーウェンス（James Cleveland “Jesse” Owens, 1913-1980）が男子短距離全種目と跳躍の4冠を制してヒトラーの目論見を見事に外し、ベルリンっ子たちのオリンピック・ヒーローとなった。プロボクサーのジョー・ルイス（1914-1981）は、1938年ヘビー級王者になると25回の防衛に成功し、白人を倒すごとに人気が高まった。ジャッキー・ロビンソン（Jack Roosevelt “Jackie” Robinson, 1919-1972）が黒人初の大リーガーとしてブルックリン・ドジャースに入団するのが1947年。東京オリンピック陸上100m優勝のボブ・ヘイズ（Robert Lee “Bullet Bob” Hayes, 1942-2002）はその後、経済的な理由でプロフットボールに転向した。そして、メキシコ・オリンピックでも黒人選手は驚異的な活躍を見せた。しかし、前出のスミス、カーロスら一部の黒人選手はアメリカ社会の人種差別と貧困に激しく抗議した。400m優勝のリー・エヴァンス（Lee Edward Evans, 1947-）も黒いベレー帽をかぶって右手を挙げた。それはオリンピックという場で行われただけに、世界の人々に大きな衝撃を与え、人種差別の根深さを改めて印象付けた。しかも、アフリカ系アメリカ人選手は、このようにずば抜けて陸上競技に強く、戦後から1980年代までのオリンピックでは、地元開催の84年ロサンゼルス・オリンピックを除くと、68年メキシコ・オリンピックが金メダル数19、メダル総数でも27個と圧倒的だ⁹⁾。

取材班は緑豊かで陽光あふれる西海岸に移動

し、カリフォルニア州サンフランシスコにほど近いサンノゼ州立大学のキャンパスを訪ねる（番組のコメントでは、カリフォルニア州立大学サンノゼ校、あるいはサンノゼ大学とも言っている）。1857年創立、学生約2万人中（2020年現在3万人）、アフリカ系の割合は10%の2千人で、メキシコ・オリンピック男子陸上でメダルを取ったスミス、カーロス、エヴァンスらの在籍校であり、また実は84年ロサンゼルス・オリンピックで大会組織委員長を務めたピーター・ユベロス氏（Peter Victor Ueberroth, 1937-）の母校でもある。カレッジスポーツは「スパルタンズ」の愛称で知られ、特にフットボールは全米最強クラスで知られる。

「その伝統を守るには主力となる黒人の力を借りなければなりません。」取材班の目的は、陸上からこのフットボールチームに入ったメキシコ・オリンピック覇者たちのインタビューだ。スポーツに優れていれば、授業料免除、奨学金も支給される。「黒人にとってスポーツは貧しさから抜け出す数少ないチャンスであるだけに、生活を賭けた闘いなのです。」「技術の優劣で決まるスポーツは実力次第で自分の生活を切り開いていきます。」というコメントの映像には、アメフトの装具をつけたアフリカ系と白人の2選手が、背広姿の中年の白人男性を肩車するシーンが充てられている。取材班はこのグラウンドで2時間あまり待たされた挙句、メキシコ・オリンピック陸上200m3位のカルロスとやっと会うことができた。2ヶ月にわたる欧州遠征から帰国したばかりで、親しげにエヴァンスらと話をしている。「メキシコで見たあの抗議の姿勢は、この陽気な振る舞いの中からは想像もできません。」フットボールチームのコーチは戦力を充実させるため、エヴァンス、カーロスに再三フットボールへの転向を勧めるが、このカーロスだけは未だに態度を明確にしていない。つまり、チームとは関係がないにもかかわらず、練習中、他の選手に対して慣れ慣れしい態度を取るカーロスに、白人コーチの怒りが爆発した

のか、「出て行け！」の大声が周囲に響き渡る。カーロスはすっかり気分を害して硬くなり、「何も話したくない」と取材班を袖にして、乗ってきたオープンカーに乗り込むとそのまま去ってしまった。（画像15）「人種問題の根深さがお互いの意識の中に厚い壁となっていたようです。」と伝える。



画像15 引き留める取材班を振り切って車で立ち去るカーロス

その後、今やスパルタンの選手であるエヴァンスが取材班のインタビューに応じた（画像16）。フットボールはお金になるが、陸上ではそうならない、家族のために金がほしい、として、「アメリカの黒人の状態を改めるために、もしスポーツを利用しなければならないなら、利用しても差し支えないと思います。」「メキシコでスミスやカーロスが取った態度は素晴らしいと思う。私が黒いベレーをかぶったのは、黒人が幸福でないことを世界中に知らせるためです。」これらの彼の言葉は、彼の声を生かすのではなく、すべてナレーションの読み原稿になっている。この時点では字幕スーパー処理はできていない。いかにも気まぐれで落ち着きのなさそうなカーロスにはハプニングにより逃げられてしまったが、エヴァンスからこれだけ真摯で明確な言葉を単独インタビューによって引き出せたのは、非常に実り多い取材であったと言える。



画像16 メキシコ五輪陸上400m覇者エヴァンスはフットボールに転向

取材班は最後に、黒人初の大リーガーとなったジャッキー・ロビンソンを、彼が副社長を務めるニューヨーク市内の海産物会社に訪ねている。「スポーツの世界で成功し、それを手掛かりに人種差別の壁を乗り越えて、社会的地位を得ている黒人もいます。」という頭ふりだ。白人の同僚と一緒に仕事をする際にも「思い上がったようなそぶりは見られません」とコメントが流れる。大リーグを引退して13年、この時50歳のロビンソンは、黒人の地位向上を目指す「全国向上協会」の幹部で、穏健派の一員だという¹⁰⁾。以下、ナレーションによるロビンソンのインタビュー内容紹介の一部として、「メキシコでのカーロスやスミスの態度を私は非常に誇りに思っています。スポーツにおけるブラック・パワーは、日常生活におけるブラック・パワーと同じでなければならないと信じます。アメリカに黒人対白人の問題があることは非常に嘆かわしいことです。私は全力を尽くして人々に私たちの気持ちを理解してもらい、両者の緊張を和らげる結果になるよう望んでいます。そしてできる限りの努力を惜しみません。時には不和を招くこともあるでしょう。しかし、それも無駄ではないはずです。」（画像17）



画像17 亡くなる3年前。野球の枠を超えて終生、人種差別に立ち向かった

スポーツの現場では、アフリカ系選手と白人選手とが同一チームで勝利という同じ目的を目指して、ともにチームワークを発揮することから、お互いに協同の可能性を実証していることが、テレビ画面からであっても、見てとれることが多い。ロビンソンはドジャーズ入団前、GMのブランチ・リッキー（Wesley Branch Rickey, 1881-1965）からどのような人種的な罵詈雑言を浴びせられても、冷静さを保ち、仕返しをしないことを約束できるかと問われた。「そんな目に遭っても反抗できない弱虫黒人（^{ニグロ}）がほしいのか」と逆に詰め寄るロビンソンに向かってリッキーはすかさず「私はそれでも反抗しないだけのガッツのあるやつがほしいのだ。」と言ってのけた¹¹⁾。それほどに差別の現状は厳しいのだと、そっと想像してみるくらいが、せいぜい外の出来事を無責任に眺めるだけで、ガッツもない人間であってもできることだろうか。

メキシコ・オリンピックでは、単なるアスリートとしての力強さだけではない、あらゆる意味で圧倒的な黒人の力、ブラック・パワーが世界中に示されたと言える。番組は、「アメリカ社会の一部には、国の威信を高めるため、スポーツ界における黒人の活躍を利用しようという考えも潜んでいるようです。しかし、そうしたことに関係なく、黒人のエネルギーはこれからもスポーツ界で爆発し続けるでしょう。そして彼らはそれを社会のあ

らゆる分野に広げていこうとしています。白人と黒人がお互いに差別と偏見の壁を取り除いた時、初めて黒人のエネルギーがスポーツ界、さらには、一般社会で実を結ぶと言えるのです。」と結んでいる。それから既に50年以上経った今、白人と黒人はお互いに差別と偏見の壁を取り除いたと言えるようになったのだろうか。人種、貧富の格差、そしてトランプ対反トランプ。このような状況下で少なくとも言えるのは、2045年以降、白人は人口の50%を切ってマイノリティに転落する、という人口予測があることである。少数派の痛みとは何か。お互いに差別と偏見の壁を取り除くという課題は、残念ながらまだ解決されてはいない。

6. 高地民族の身体的可能性

「あすのスポーツ」はブラック・パワーを第1集に取り上げ、アメリカの根深い社会問題としての人種差別にまで踏み込んでみせたが、テーマがスポーツである以上、アメリカ以外の国についても、ブラック・パワーが科学的にどこまで優位なのかという問いが残る。もちろん、メキシコ・オリンピックでアメリカ代表が塗り替えたオリンピック記録は8あり、そのすべてがアフリカ系アメリカ人選手による功績である。同大会でのアフリカ系アメリカ人の獲得メダル数についても先に触れたが、これをさらに、ヨーロッパやアフリカにまで広げて見るとどうなるだろうか。リレーを含む全陸上競技種目のうち、男子黒人選手は総数90個のメダルのうち40個を獲得し、24種目中11種目で優勝を果たしている¹²⁾。

当然、これは男子に限った話ではなく、女子の可能性も台頭しつつあった。1960年ローマ・オリンピック女子100m決勝を11秒0(追い風参考)でゴールしたアフリカ系アメリカ人ウィルマ・ルドルフ(Wilma Glodean Rudolph, 1940-1994)は、1936年ベルリン・オリンピックのヘレン・

ステイブンス(Helen Herring Stephens, 1918-1994)以来24年ぶりの短距離金メダルをアメリカにもたらした。さらに200mを世界新で、400mリレーもアンカーを務めて優勝し、金メダルを3個獲得した近代オリンピック初の女子選手となった。加えて、すらりと長い脚に美貌の彼女にはイタリアメディアから「黒真珠(la perla nella)」、フランスメディアから「黒いカモシカ(la gazette noire)」の称号が寄せられた¹³⁾。だとするならば、なおのこと、アフリカ系選手には全員、第1集がさらっとコメントしていたような「黒人の天性のバネ¹⁴⁾」があるのだろうか。

第5集の取材先はエチオピアとケニアでいずれも高地民族を擁するアフリカ国だ。エチオピアはアベベの母国、しかもエチオピア帝国最後の皇帝ハイレ・セラシエ1世(Haile Selassie I, 1892-1975、在位1930-1974)統治下の晩年である。エチオピアのスポーツ選手は全員、皇帝の親衛隊が軍隊に所属し、この皇帝なしにエチオピアスポーツは語れないとされる。親衛隊のキャプテンでもあるアベベがオリンピック・マラソンを2連覇した時、皇帝は「心身の力を要する競技で勝利の栄冠を得たことは、同時に世界的な名声を我が国にもたらしたわけで、その功績は大きい」と称賛した¹⁵⁾。人材育成もトレーニングや競技施設も、すべてスポーツの普及に努めようとする皇帝の施策次第である。皇帝臨席(画像18)のもとで行われる総合スポーツの全国大会に当た



画像18 皇帝自ら優勝トロフィーを授与する

る四軍総合スポーツ大会（親衛隊、陸・海・空軍）に加え、番組では、まだ始まったばかりだという海軍の水泳訓練の様子まで出てきた。とはいえ、当時の400m自由形1位の記録が6分45秒9だという。メキシコ・オリンピックでのこの種目の優勝タイムが4分9秒0だから、なかなか先は長そうだ。その点、陸上ではエチオピアは歩く生活を通して足腰が自然に鍛えられて強くなり、特に高地に暮らす人々は心肺機能や持久力の向上が自然に促され、育成につながる利点があるという。



画像19 ケニア陸上欧州遠征代表選考予選会場（ナイロビ北東部都市ニエリ）

ケニアでも陸上競技大会が始まろうとしていた（画像19）。グラウンドの設備は整わず、大会費用も旧宗主国のイギリスが援助している。たとえ、高地で育ち、遠距離を歩くこともいとわないことで素質が磨かれる点があるとしても、より優秀な指導体制とトレーニング方法が加わることで、この高地民族の素質をさらに伸ばしていくことにつながる、と番組も結論づけている。黒人は肉体的にどこまで優秀なのか、という問いについては、1968年にロサンゼルスタイムズが掲載した5回シリーズ中、「黒人は肉体的に優秀なのか」「黒人には肉体的利点があるのか」の二つの記事に早くもヒントがある。インタビューを受けたトマス・キューアトン体育学教授は遺伝説をこのように退けた。「長年のトレーニングのゆえ？ イエス。モチベーションのゆえ？ イエス。社会的な目標のゆえ？ イ

エス。差が出るのは以上の理由。人種ではない。」¹⁶⁾ 人種差別などの社会問題を背景にしたモチベーションが強く働くことはあるが、「黒人は身体のパネが強い」といったステレオタイプや、山岳地帯をよく歩くから鍛えられるなどの環境説だけでは、アフリカ系選手の強さの科学的な説明にはなり得ない。「あすのスポーツ」も、この点はまださらに先に続く問題提起を示すにとどまったと考えられる。（画像20）



画像20 “黒人アスリートに天賦の運動能力”は彼らに努力も多様性も見ないステレオタイプ

7. まとめ

2018年度から2020年度まで3年間にわたり、NHKアーカイブスを視聴する機会を得た。それらを通して確認できたことは、NHKがテレビを「大衆のメディア」と位置づけ、東京オリンピックを契機として、視聴者がふだん観ることのない他所の風景、祭礼、人々の営みや、外国のスポーツ、その選手たちなどを美しく魅力的に観せるために映画にはない「映像」の創造をたゆまず行っていたことである。それらを通じて、お茶の間の庶民に向けて内容を分かりやすく伝える努力を重ねていたことが、静止画を選ぶ作業の過程で実感された。

東京オリンピックの準備段階から閉幕後に至る

までの全期間において、カラー放送への（一部）移行などの直接的な放送技術のみならず、地図やパターンにアニメーション的な動きを加えてデータを視覚的に説明する手法や、スーパー挿入の開始など、各方面にわたる映像の加工や工夫と、それを積極的に番組に採り入れていく姿勢も画面上からうかがわれた。カラー放送開始や地方局の相次ぐ開局、長期間にわたる海外取材、様々なジャンルにわたる番組開発など、当時はテレビ番組の制作状況が劇的に変化を遂げていく時期でもあった。それらも視聴した番組からよくうかがえた。

テレビ番組が、視聴できる場所に暮らす世界中の人々に向けて思想的・社会的に非常に大きな影響を与えたことは自明である。今回、アーカイブスで取り上げた番組は、日本のテレビ史から見て、人間でいえばまだまだ青少年期ではあるが、その影響は著しく認められる。例えば「新日本紀行」は、日本の地方の美しい風景や素朴な人々の生活を紹介することによって、そこを人々に「一度行ってみたい」と思わせる場所にした。その結果、新しい観光地が次々と地方に出現する。「美しい日本と私」というサブタイトルを持つ1970年代の国鉄キャンペーン「ディスカバー・ジャパン」や若い未婚女性の旅「アンノン族」などへと続く流れを創ったように思われる。また、視聴した海外スポーツ取材番組の中でも、スキーやサッカーの映像からは、「スポーツは観て楽しむだけではなく、自らが行って楽しむもの」というスポーツの大衆化の可能性を提示する意図が見てとれた。同時にスポーツの高度化をどこまでも追求しようとするれば、それは自ずからアマチュアの域を抜けざるを得ず、やがてプロとしての実践者が登場し、そこに商業主義が台頭せざるを得なくなるといふ、その後のスポーツが抱える矛盾の萌芽も認めることができる。これらの傾向や思想は、その後20年をかけて広く世界に広まっていくことになる。すなわち、1969年に取材、制作された番組は「あすのスポーツ」と題されているが、実はこ

れは「あすへのスポーツ」という意味合いを非常に強く持っていることがわかった。

謝辞

本稿は2020年度第1回NHK番組アーカイブス学術利用トライアルの成果の一部となります。貴重な映像資料の閲覧をご許可いただいたNHKに感謝いたします。またその場をご提供くださいましたNHK大阪拠点放送局に厚く感謝いたします。本稿作成のための放送資料の整理には2019年度高橋信三記念放送文化振興基金助成、および脇田・飯塚が受けた椋山女学園大学個人研究費を使わせていただきました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 飯塚恵理人・脇田泰子「情緒的日本文化の映像表現に関する基礎的研究～1964年東京オリンピックがもたらす日本らしさ・東京らしさを映し出すテレビの進歩～」(共著)、2019、「椋山女学園大学文化情報学部紀要」、第19巻、pp. 1-13
- 2) 時間差攻撃や回転レシーブなど斬新な戦術を取り入れ、「東洋の魔女」と呼ばれたバレーボール女子日本代表は、決勝でソ連の猛追を振り切り勝利して念願の金メダルを獲得した。1964年10月23日の生中継で記録された視聴率66.8%は、日本のスポーツ中継としては歴代最高記録。
- 3) NHKクロニクル番組表検索結果 <https://www2.nhk.or.jp/archives/chronicle/pg/page010-01.cgi?keyword=%E3%81%82%E3%81%99%E3%81%AE%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84> (最終閲覧日2020年11月15日)
グラフNHK第10巻第21号通巻第299号(昭和44年11月1日号)海外取材番組「あすのスポーツ」
- 4) NHK海外取材班『スポーツと社会』日本放送出版協会1970、p. 4
- 5) 公益財団法人日本オリンピック委員会(JOC) フェアプレー <https://www.joc.or.jp/olympism/fairplay/football.html> (最終閲覧日2020年12月1日)
- 6) 通常、オリンピックは都市開催のため大会名に都市名を冠するが、メキシコがスペイン語国のためか、メキシコシティ・オリンピックと言うより、国名で表現する場合が多い。
- 7) オリンピック憲章第50条第2項「オリンピックの用地、競技会場、またはその他の区域では、いかなる種類のデモンストレーションも、あるいは政治的、宗教的、人種的プロパガンダも許可されない。」
- 8) 五輪陸上としては、1908年ロンドン・オリンピックでしか行われていない種目で、200m・200m・400m・800mを担当する4名で構成され、テイラーは第3走者で

- 400m 走った。1908年6月にペンシルバニア大学獣医学部卒業、翌7月にロンドン・オリンピックで金メダルを獲得し、12月に腸チフスのため26歳で亡くなった。
<https://www.blackpast.org/african-american-history/taylor-john-baxter-jr-1882-1908/>（最終閲覧日2020年12月4日）
- 9) Arthur R. Ashe, Jr., *A Hard Road To Glory: A History Of The African American Athlete since 1946* Vol. 3, Amistad Press Inc. 1993 ロサンゼルス・オリンピックでは金27、メダル総数40。
- 10) 全米黒人地位向上協会（全米有色人種地位向上協会＝NAACP National Association for the Advancement of the Colored People 本部・メリーランド州ボルチモア）リンカーンゆかりのイリノイ州スプリングフィールドで1908年に起きた人種暴動を機に結成された、アメリカ合衆国で最も古い公民権運動組織の一つ。当初は急進的と見なされていたが、60年代以降のより急進的な諸潮流の台頭により穏健派と分類されるようになった。会員数30万人 <https://www.naacp.org/> より（最終閲覧日2020年12月30日）
- 11) Jules Tygiel, *Baseball's Great Experiment: Jackie Robinson and His Legacy*, New York Oxford University Press, 1997, p. 66
- 12) 川島浩平『人種とスポーツ』中公新書、2012年、p. 173
- 13) Davis Michael D., *Black American Women in Olympic Track-and-Field*, McFarland & Co., c1992, xiii
- 14) 1936年ベルリン・オリンピック陸上でオーウェンスが100mに次ぎ200m、100mリレー、そして走り幅跳びでも通算4個の金メダルを獲得したことについて「黒人の天性のバネを世界に認めさせました。」というナレーションがある。
- 15) NHK海外取材班、前掲書、p. 37
- 16) Los Angeles Times, Charles Maher “Blacks Physically Superior? Some say they’re hungrier” “Do Blacks have a physical Advantage? Scientists Differ.” 1968
Jon Entine, *Taboo: Why Black Athletes Dominate Sports And Why We’re Afraid To Talk About It*, PublicAffairs, p. 230

わきた・やすこ/文化情報学部教授

E-mail : wakita@sugiyama-u.ac.jp

いづか・えりと/文化情報学部教授

E-mail : erito@sugiyama-u.ac.jp